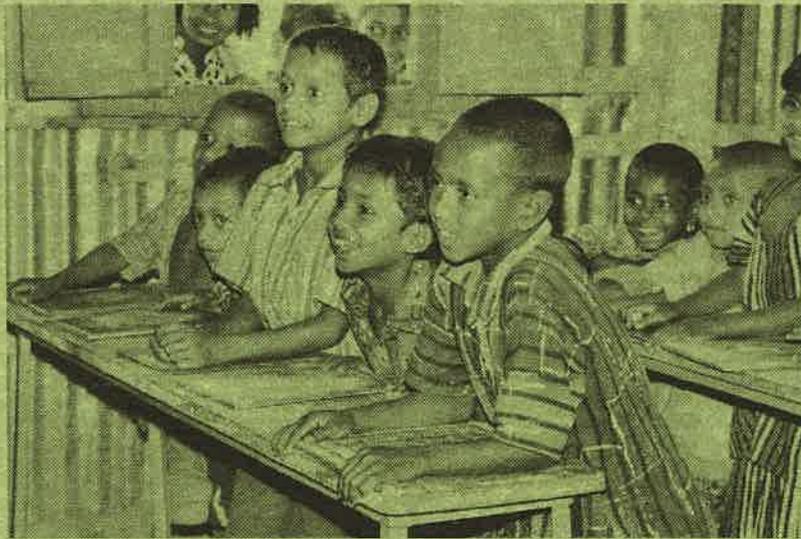


第 30 回
ACEF バングラデシュスタディツアー



2006年3月17日(金)～24日(金)



ネトロコナの先生とお子さん



BDPスクールの女の子
(バタティジェレパラ)



BDPスクールの
男の子
(ショアリカンダ)



目次

1. バングラデシュ人民共和国概要 … 2

2. バングラデシュでの生活 …3

3. BDP 概要 … 5

4. ACEF スタディツアー メンバー紹介 … 6

5. BDP スタッフの皆さん … 7

6. ツアー日程 … 8

7. 日誌 … 9

8. ネットロコナ … 20

9. Wrap Up Discussion … 22

10. 感想文 … 26

11. ありがとう船戸先生 … 38

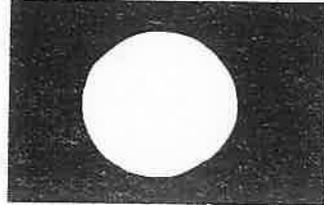


1. バングラデシュ人民共和国 概要

国名: バングラデシュ人民共和国

↳ バングラ=ベンガルの、ベンガル人の
デシュ=くに

国旗: 赤い丸=太陽、独立戦争での血
緑=農業の発展、大地



面積: 14万4千平方キロメートル

↳ 日本の約4割、北海道の約2倍
国土の大部分が平坦なデルタ地帯
乾季(11月~3月)雨期(6月~10月)

人口: 1億3,810万人

(年平均人口増加率 1.7%)

↳ 1平方キロメートルあたり898人!!

言語: ベンガル語(国語として)

成人識字率: 49.6% (男性 50% 女性 21%)

平均寿命: 男性 61 歳 女性 64 歳

宗教: イスラム教徒 89.7% ヒンズー教徒 9.2% 仏教徒 0.7% キリスト教徒 0.3%

通貨: タカ (1米ドル=68.8 タカ)

略史: 1947年8月14日 東パキスタンとして独立

1971年12月16日 バングラデシュとして独立

日本との関係: 1972年2月 バングラデシュを承認

経済面では最大の援助国

↳ 独立の2ヵ月後

バングラデシュは日本に好印象を抱く
親日的な国民性

<参考文献>

「バングラデシュを知るための60章」明石書店 大橋正明・村山真弓編集

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/Bangladesh/data.html>

<http://www.unesco.jp/vontents/isan/shoukai-index.html>

<http://www.ratio.co.jp/support/zukan/flag/fl37.html>

2. バングラデシュでの生活

衣装: 男性 ルンギ(腰から下に大きな布を巻くスタイル)

女性 サロワ・カミューズ、サリー

(サロワ・カミューズはワンピースとズボンと大きなスカーフの3ピースからなっている)

⇒サロワカは着ていて涼しいし、

洗濯してもすぐに乾くから◎

⇒一着 800 タカ~1500 タカで買える

食べ物: ☆カレーにお米・ルティ

:ルティとはナンが丸く薄くなったようなもの。やわらかいおせんべえみたい?

⇒カレーは何種類あるのか分かりません(笑)その中でも

ナスのカレーは絶品!!!!!!!!!!!!!!

☆ダルスープ

:ベンガル語で豆=「ダル」。その名の通り豆のいっぱい入ったスープ。カレーを食べ終わった後に食べると、お皿もキレイになって GOOD!!

☆野菜と果物

バナナ・パパイヤ・ブドウ・キュウリ・タマネギ・トマト etc.

⇒“バナナ”と一言で言うのはバナナに失礼! 中身も

黄色だったり、丸みがあったり... 美味しい!!!!!!!!!!!!!!

☆チャー

:あま~いミルクティー? でもその甘さがクセになるんだなあ◎

☆お菓子

以外にもスナック類が豊富♪スパイスの効いたベビースターラーメンのようなもの、マリービスケットのようなもの。

⇒ビスケットをチャーにつけて食べるとこれまた美味◎

移動手段: 徒歩・バス・タクシー・リキシャ・列車・舟

⇒リキシャはなんと日本語から!!

500m あたり約 10 円

⇒バスもタクシーもとにかくギュウギュウに人が乗っている。

落ちそう!?



4. スタディツアー メンバー紹介



FUNATO 先生

普段は少年のようにとってもオチャメ☆いつでもカメラでパシャパシャ♪それとは反対に、お話をする時には真剣で熱心。船戸先生のおっしゃっていたことは胸に響き、これからの人生において貴重なものとなりました。



NAKAGAWA さん

寝る時はルンギ！チャーターが好き！いつも穏やかで、その場をやわらかい雰囲気してくれました。シェアリングの時に、しゃっくりの止まらない船戸先生を「わっ!!」っと驚かしました(笑)。



NORIKO さん

バングラデシュが大好き♡ベンガル語もペラペラ。サロワカも素敵に着こなしていました☆もしかして、のりこさんはバングラデシュ出身!?!のりこさんのパスポートがだんだん緑色に……!?



NAOKO さん

なんと言っても、なんでも良く食べていました!!体はとっても細いのに、どこにそんなに入るのか…と、いつも不思議でした(笑)。いつでもバイタリティにあふれ、とにかくチャレンジチャレンジ。フルートを吹く姿は beautiful☆



TAKAKO さん

いつでも好奇心旺盛。車に乗っている時も、見るもの全てに興味津々♪学生たちよりも学生らしかったです☆でも、学生のみなを「子供たち」と呼んで、なんだかお母さんのようで、一緒にいるだけで安心感がありました◎



KAZUKO さん

たかこさんと仲よし♪食事の時はいつもたかこさんの隣にちよこんと座っていました。とっても可愛い仕草が多くて、キュンとしちゃいました♡そして、いつでも暖かい言葉をかけてくれました。



UCCHI

「ギャーアアア!!!!クモー!!!!」と、クモもびっくりしちゃう声が印象的(笑)。一言一言が面白かったなあ☆困ったときは、いつでも助けてくれるしっかり者。うっちはバンザイ☆



KUMIN

子供たちが大好き◎子供たちがいると、すぐに行って一緒に遊んでいました。スタイルが良くて、サロワカをキレイにかっこよく着こなしていました◎でも話すとき…とってもプリティな女の子でした♡



EMI

とっても熱心にベンガル語を覚えていました。BDP スタッフともフレンドリー♪シェアリングのとき、えみの言う言葉には暖かさがいっぱいでした。そうそう、えみもなおこさんに負けないくらいたくさん食べていました(笑)。



NOBUE

このメンバー紹介を書いている、ちょっと？頼りない二十歳の女の子です。ツアーの間、メンバーのみんなに支えられ、その優しさにつつまれながら、過ごしていました。これから、しっかりした大人を目指して頑張ります!!

5. BDP スタッフの皆さん



BDP のダッカ、プーバイルオフィスの皆さんです。スタディツアーの間、大変お世話になりました。この写真には写っていませんが、ネトロコナオフィスの皆さんにも同様に、親切にしてくださいました。BDP スタッフの皆さんに支えられ、このスタディツアーで様々な貴重な経験をすることが出来ました。私たちが疑問に思うことや分からないことを質問すると、分かりやすく答えてくれました。また、

とても親しみやすく、ツアー中の不安な気持ちを取り除いてくださり、精神的にも支えていただきました。ありがとうございました。そして、皆さんは歌がとってもお上手です☆



22日(水)

・朝祷:クミン マタイ6:5-15 「人の過ちを赦す」

この箇所を読んで、初めて過ちを赦せるようになった。

・ネトロコナでの最後の朝食。最後は皆で一緒にご飯を食べた。

・プーバイルへ移動

ネトロコナとの別れは寂しかった。みんなありがとう！！

・プーバイル到着後、FREE TIME

お土産を買いに行った。

☆はじめて道路を歩く側になったけど、こわかった！（えみ）

・Cultural Show

地域の子たちがベンガル・ダンスやベンガル・ソングを披露してくれた。私たちはエーデルワイスなどを披露。最後に、BDPスタッフによる歌。

ニケルさんの踊りがステキでした！！

その後、みんなでお菓子を食べながらおしゃべり。

・リナさんとおしゃべり

以前スタディー・ツアーに参加したイガラシリナさんがプーバイルに来て下さり、色々なお話をうかがった。

・夕食後、プーバイルスタッフと短いディスカッション

サイフルさんのバングラデシュ・日本の2国間への思い、船戸先生の思いなど。

・晩祷:ウッチー マタイ6:19-21 「天の富、地上の富」

天に富を積むことへの思いについて。

23日(木)

- ・ラジオ体操前、直子さんたち4人娘は散歩。植物園見学。
- ・FREE TIME
 - バザールでクッキー、お茶、ダル豆などを購入。
 - 朝の市場も見学。たくさんの魚が売られていた。
- ・船戸先生、新聞社のインタビューをうける
 - 熱く続いていた。(直子さん)
- ・ダッカスタッフを交えて、Wrap Up Discussion。
 - また、私たちの質問にも答えてくださった。
- ・昼食後、ヘモントさん・ステファンさんの合奏を聴きながら荷物整理
- ・閉会礼拝：船戸先生 使徒言行録3:1-10
 - 自分の足で歩くことが大切。「人を生かす」キリスト。
- ・みんなで手を繋いで円になり、歌を歌い、最後に握手で別れた。
- ・バン格拉デシュ航空072便に搭乗
- ・飛行機に乗ると、サロワ・カミューズだったえみにベンガル人の方が「fine！」と言う。えみの返事は「ドンノバット！」

24日(金)

- ・成田空港着
 - 気温は9度だった。お祈りをもって解散。
 - アバデカホベ！



8. ネットロコナ

私たちが3日間滞在したネットロコナ。自然の美しさ、村の人々やBDPスクールの生徒たちとの交流など、思い出がたくさんある。その中で一番印象的だったBDPとの先生たちとの交流会について取り上げてみたい。

最初に3グループにわかれてディスカッションを行った。自己紹介の後、通訳をしてくださっていたBDPスタッフはいなくなり、私たちは先生方と身振り手振りで話をした。「日本の学校制度の仕組み」「日本での教育方針」などについて尋ねられ、また私たちは「教師という仕事は楽しいか」「教師と主婦の両立は大変か」を尋ねた。先生たちは17歳～24歳くらいの方々だった。ここで先生達と親しくなることができたと思う。

次に女性陣は、先生たちの大切なサリーを着させていただいた。サリーの色は青・赤・茶・金など色とりどり…。中には結婚式用のサリーもあった。サリーを着た後、眉間に紅い化粧品で丸を描いた。のりこさんとのぶえはまゆげまで描いてもらっていた！太くてステキだったよ☆笑）写真会を行った後、メンディもやっていただいた。柄は太陽、ハート、星など…。いい思い出になった。

最後はみんなでティータイム。先生方はビスケットをチャーにつけて食べていた。みんな元気で笑顔が素敵な方ばかりだった。ドンノバット！楽しいひと時が過ごせたよ。

☆番外 ～ネットロコナBDPオフィスにある旗～☆



BDPオフィスにこのような旗があった。

「 TORNADO-2004
COLD-DPP Emergency Response
BDP•Netrokona 」

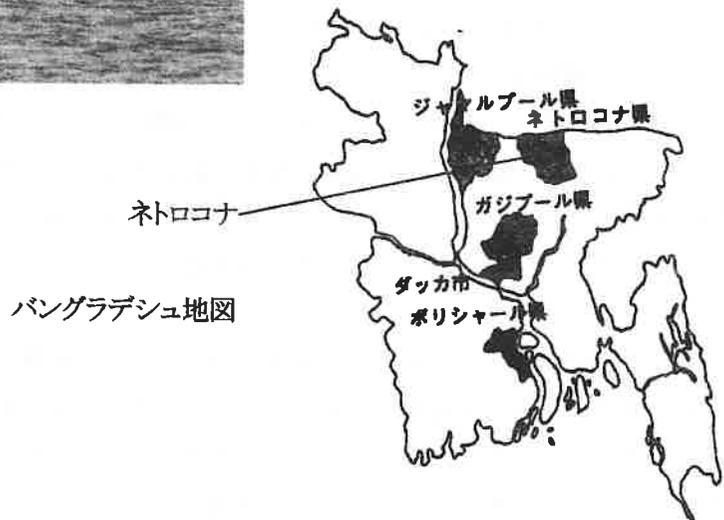
2004年4月、ネットロコナ県を台風が襲い、BDPオフィス周辺の村が大変な被害にあった。BDPスクールは2校全壊・1校半壊、前BDPオフィスも全壊し

てしまった。その時、ACEFはすぐに緊急募金を集め、校舎建て直しのために送金をしたのだが、BDPは寺子屋学校再建だけでなく、村の人々の救済キャンペーンも行い、他の団体と共に救済活動を行った。この旗はその働きに感謝して送られたものである。

BDP 事務所の近くに住む一家



コンクシヨ河





9. Wrap Up Discussion 3/23

スタディツアーメンバー

うっちー：学校訪問のときに子どもたちは、バングラデシュの国歌を私たちに歌ってくれて、私たちにも日本の国歌を歌ってほしいと言われたが日本の国歌は問題が複雑なため、少し戸惑った。彼らは誇りを持って国歌を歌えるので、それが羨ましいと感じた。バングラデシュには以前、父と弟が来たことがあったので自分も来ることができて嬉しい。元々のスケジュールにはスラム街への訪問は予定されていなかったが、スタッフの配慮により行かせていただくことになり、スラムの様子を見ることができ非常に良かった。

くみこ：教育が行き届いていない地域でどう教育を行き渡らせるか考えたときにまず思い浮かぶ方法が外国のNGOがその地域に入っていくという方法。だから、現地の人たちが作った組織BDPは私に新しいアプローチの仕方を教えてくれた。外部からのNGO団体が入って教育の場を与えるのは簡単だが、その国の人たちの手でそういった場を作っていくことは非常に大事なこと。BDPは教育問題に取り組みながらも女性の地位向上に努めていて、単純に彼らの仕事がカッコイイと思った。

のぶえ：「国が発展していく」とはどういうことなのか。「開発」とは何か。発展していく中で国の個性を失わずにその良さを残して行ってほしい。日本に帰ったら、ここで見たものや感じたことを周りの人に話したい。BDPスタッフは私たちに対してとても親切にしてくれたので感謝しているが、食事の豪華さなどを考えると「お客さん」のような待遇を受けていた。「スタディー」ツアーということを考えると、バングラデシュの一般的な生活をし、バングラデシュの真の姿を見たかった。

えみ：体調が本調子でなかった私を送り出してくれた両親に感謝。また調子が悪くて外出もできなかったときを思い出すと、こうして海外にきて新たな出会いをもてるまでに回復したこと、ここまで導いてくださった神さまにも感謝の思い。ACEF、BDPともに温かい人ばかりでそれにも支えられた。「勉強」がいかにかに人の可能性を広げるか、また自分が勉強できるということがどれだけありがたいことがわかったのがこれから勉強に打ち込めそう。ここで受けた愛をこれから返そうと思う。

孝子さん：今回はバングラデシュ 3 回目の訪問だった。特に元気な子どもたちの姿を見られてとても幸せだ。自分は英語もベンガル語も出来ないがそれでもバングラデシュの人は自分のことを受け入れてくれて、ここではありのままの自分でいられたのでとても心地が良かった。これからも ACEF のために働きたい。

和子さん：今までバザーの仕事などで ACEF の一員としてバングラデシュに何度も訪れたことがあるが、今回が最後かもしれない。しかし、ACEF や BDP のために日本で今後自分に何が出来るのかを考えたい。以前、マラカール先生が私におっしゃってくれた言葉が今でも私の支えになっている。「BDP のためにありがとう。」

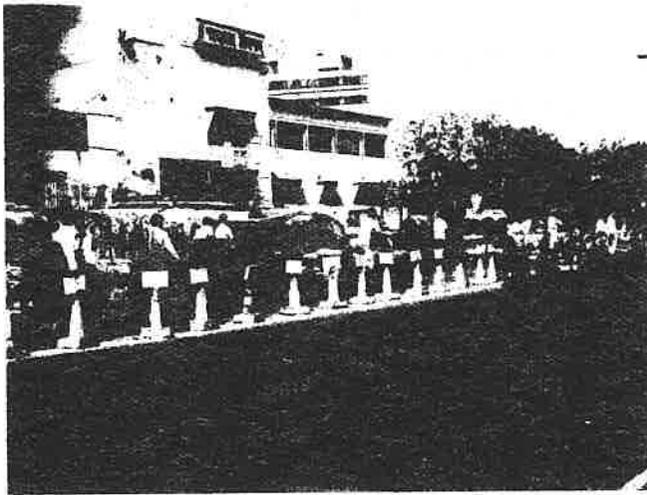
なおこさん：バングラデシュ独特のトイレ様式が気に入った。食事は栄養のバランスがとれていて味もとてもおいしかった。普段は自分が食事の準備をしなければいけないので、食事の準備をせずに食べられることが嬉しかった。学校に行って感じたことは、ここでは生徒が先生のことを 100% 信頼しているということ。授業中は先生の目をしっかりと見つめ、先生と生徒との間で良い関係が築けていた。その点、日本とは少し違っていると感じた。

のりこさん：バングラデシュを訪れる直前に右手を骨折し、一時はどうなることかと思ったが無事に今年も来れてよかった。しかし、利き手である右手を使えないことがこんなに大変だとは思わなかった。日本でも多少、不自由していたがバングラデシュでは特に、片手が使えないととても不便である。学校訪問のときに、以前から自分が気にかけていた 2 人の男の子の姿が見当たらなかったのも、先生に話を聞いてみるとその子たちはドロップアウトしてしまっただけで、それが今回とてもショックだった。その子たちが再び学校に戻ることを願うばかりだ。

中川さん：ここに来るまでバングラデシュについての話を人から聞いていたが、本当に聞いていた話のとおりのが起きていた。日本ではイライラして、暗い表情をしている人が多い。しかし、バングラデシュでは子どもたちも、先生も、スタッフも皆とても嬉しそうで楽しそうな表情をしている。皆、Happy。自分もこれから ACEF の事務局長として Happy にやっていきたい。



船戸先生：色々な配慮をしてくださった BDP のスタッフには心から感謝をしている。1週間という限られた春のスタディツアーでこんなに内容の濃い、充実したスタディツアーは今までになかった。 Bangladesh の新聞社2社のインタビューのセッティングをしていただいたことにもとても感謝している。これで、 Bangladesh の多くの人々に自分たちの活動について知っていただける。



ニューマーケットの近く

BDP スタッフ

ステファンさん: みなさんがバングラデシュで感じたことや考えたことを表現してくれたことは BDP にとって、とても大切なことだった。皆さんが来てくださったことによって、我々はもちろんのこと、教師や生徒にもインスピレーションを与えてくれた。BDP としては、これからも生徒の学校への出席率が安定し続けるように努めたい。

ヘモントさん: バングラデシュの政治状況があまりよくなかったので心配していたが、こうやって無事にこのスタディーツアーを終えることができそうなので神様に感謝したい。BDPの学校でのドロップアウト率は低いとは言え、のりこさんが気にかけていた男の子たちはドロップアウトしてしまったので、今後ドロップアウトしない方策を考えなければならない。

ファルークさん: 今回はツアーにあまり一緒できなかったが、私たちをサポートしてくださってありがとうございます。日本に帰ったら、ぜひバングラデシュでのことを家族や友達に話してください。また来てくださいね。

アムブロスさん: ここに来てくれてありがとう。特に中川さんや船戸先生には感謝しています。船戸先生は引退されますが、引退してもぜひ私たちを支えてください。

ソンチョイさん: 日ごとにバングラデシュの物価は上がってきていて、これは非常に喜ばしいことである。プーバールの BDP オフィスは借地なので、安定するためにも BDP の所有する建物が必要なため、出来れば皆様にも今後ともご支援していただきたい。最後に、船戸先生にはぜひ奥さんとご一緒にバングラデシュへ来ていただきたい。

アルバートさん: こうやって、BDP が活動できるのも ACEF が支援して下さっているからです。ACEF は私たちにとって非常に心強いパートナーです。

“There is no perfect person, but perfect intention.” (アルバートさんの言葉をそのまま引用)



スタディー・ツアーに参加して

内野直子

バングラデシュの人々は本当に温かかった。お世話をしてくださったBDPスタッフを始め、大切なサリを貸してくださった先生方、お花をくれた子供たち、道端ですれ違った時に挨拶を交わした人…。出会った人々から、忘れられない多くの言葉や感動をいただいた。また、空や星、天の川、蛍など自然の美しさ、心に響くバングラデシュの歌も忘れられない。本当に素晴らしい国だった。

私は今回スタディー・ツアーに参加し、初めて貧困について真剣に考え始めるようになったのではないと思う。今まで貧困についての講演会を聴いたり、本を読んだり、写真を見ることがあった。その度に「貧困って大変な問題だな」とは思ったが、私の中ではどうしても現実のこととして実感が湧かなかった。

しかし、色々なことを自分の目で見た。子供を抱えて物乞いをする女性、窓ガラスにひびが入っていて今にも壊れそうなバス、場所を追われ、何回も移動せざるを得ないスラム街の学校。日本では考えることのできなかつた厳しい現実が目の前にあった。また、学校に通うことができなくなり、働き出したという子供もいた。私はたまたま日本に生まれたから希望通り大学も通うことができ、バングラデシュへ行くこともできたが、もしあの子のように学校へ通いたいのに通うことができなかつたら…。とても悔しいと思う。そう考えた時、私は勉強する機会が与えられていたのにもかかわらず、そのことに感謝をし忘れて過ごしてきたことをとても恥ずかしく感じた。

BDPスタッフのお話にもあったが、私はバングラデシュの人より、どんなに小さなことにおいても選択肢がある。選択肢があるという恵み、勉強できる恵み、食事を3食取ることができる恵み、日本では気付くことのできない恵みを今回バングラデシュの人々や大地から学び、感じることができた。私はその多くの恵みに感謝しつつ、自分がこれからどうするべきなのか、また、貧困問題についても続けて考えていきたいと思う。

最後に、スタディー・ツアーに参加させていただけたことに感謝したい。どうもありがとうございました。



将来につながる経験

柴岡 久美子

ACEF のバングラデシュスタディーツアーに参加させていただいたことによって、私は将来の具体的なイメージを湧かせることができたと思う。というのも、私が将来やりたいことは学校のない地域に学校を作って子どもたちが全員学校に通えるような環境作りをすることである。つまり、BDP がやっているような活動内容がまさに私が興味を持っていることであった。

初めて訪れた BDP の小学校は、スラム街にある学校だった。家の周辺にはお墓があり、家の床の隙間からは川の水が見え、家が密集している場所にちょっと大きめのトタンづくりの細長い建物があった。それが BDP の小学校だったので、「え?!ここが小学校?!」というのが正直な感想だった。そのとき、今3学年が授業をしていると聞かされていたので、てっきり独立した教室が3つあるのかと思いきや入ってみると、クラスとクラスを分けるものは壁ではなく仕切り2つだけ。だから、隣のクラスの声はまる聞こえだった。授業に集中しづらそうなどころだったが、子どもたちはみな先生の目をしっかりと見つめ授業に聞き入っていた。この学校を訪問して学んだことは、独立した教室を作ったり、キレイな校舎を作ったりして子どもたちの学ぶ環境を整えることはもちろん大切だが、そのことにエネルギーを注ぐのは二の次であって、まずは子どもたちが教育を受けられるような場を作ることが一番大切だということ。これは当たり前のことかもしれないが、当然のように独立した教室を期待していた私はその時このことを理解していなかったのだと思う。

BDP のスタッフには本当によくしていただき、常に行動を共にしていたので色々なことについて話すことができた。彼らの仕事についても色々聞くことができ、彼らの努力や情熱に私は感動した。例えば、学校を建設するためにはそれなりに費用がかかるため設計図を描いたりレンガの買い付けに行ったりするのはスタッフたち自身でやるそうだ。それに加えて、小学校で使うイスや机は BDP が指導している職業訓練所で作ったものなのでほとんど費用がかからない。これらの努力が実を結んでいることは、彼らの話や BDP の小学校の数が増え続けていることから分かった。彼らの話を聞き、私は改めてその仕事の魅力を感じた。

バングラデシュに行って、私の将来のことに対する思いはより一層強くなったと思う。どういったステップを踏んで学校を作るのか、どうやって教師を採用するのか、どうやったら多くの子どもたちが通えるのかなど、具体的に学べたと思う。自分の将来の夢を実現することができたら、バングラデシュに少しでも恩返しができると思う。そのために、学生として今やるべきことを私はやりたい。

最後に、このようなスタディーツアーを計画して下さった ACEF の方々や BDP のスタッフ、私たちを受け入れてくれたバングラデシュの人々、私をバングラデシュに送り出してくれた家族には感謝しています。ありがとうございました。



私のバングラデシュスタディツアー

須永修枝

バングラデシュから日本に帰ってきて一ヶ月が経とうとしている。バングラデシュでの日々や経験を思い出すと、私の中にある全ての感情で胸がいっぱいになる。ネトロコナで見た夕日と本当に満天の星空の美しさ、勢いよく走ってきたアヒルの大群に驚いたこと、緑に囲まれた生活の心地よさなどというような、そこにいっただけで楽しかったし幸せな気持ちになれた。しかし、その一方で学校に行けず、働かなければならない子供たちがいること、首都ダッカでのスラムの現状、物乞いをしている人々の存在、というような状況を目の当たりにして、苦しくなったり戸惑ったりしたことも事実であり、現実であった。どちらにしてもうまく言葉で言い表せない感情が、毎日私のなかにこみ上げてきた。笑ったり、涙が出てきたり、なにをどう整理したら良いのかを考える前に、勝手に、自然に全てのことにに対して心と体が反応していた。そんな毎日だった。

そして今、バングラデシュでの経験について、少しは冷静にそして距離を置いて考えているが、やはりなかなかすっきりはしない。貧しさと豊かさの違い、何がその差を生むのか、そもそもその違いは何か。経済的に豊かならば人間的にも豊かで恵まれているのか。そして開発、発展と自然の共存は本当に成り立つのか、もし可能ならばどのように共存していくのか。私はまだまだ経験不足、勉強不足でありこれらの答えを出すことができない。もしかしたら答えがないのかもしれないと思う。しかし私はこれらのことについて考えることを止めたくないし止めるべきではないと思っている。私はバングラデシュという国を知ってしまったし、その現状を少しかもしれないが見てしまったし経験してしまった。何とかしてその責任を果たしていきたいと思う。今はバングラデシュにことを考えたり、誰かに話したりすることしかできないかもしれないが、バングラデシュのことを色々な人に知ってもらいたいので、その努力はしていきたい。

最後に、このスタディツアーで出会ったみんな、このツアーを支えてくれたBDPスタッフの皆さん、そして参加させてくれた家族にとっても感謝している。本当にありがとうございました☆

これから私がすべきこと

矢野 恵美

バングラデシュでの7日間、自分が生き生きしていた。よく笑い、よく歌った。泣き虫の私はバングラデシュで更によく泣いた。それは嬉しいときもショックなときもあったが、とにかく感情が強く自分に押し寄せ、頭で考えるだけでは処理できない体験がいくつもあった。「それがこのスタディツアーの狙いです」と船戸先生はにこにこしておっしゃった。

準備会するとき、「知る」ということは“愛する”ことを究極とする」という話をきいたが、バングラから帰りこれを自分なりに解釈することができた。“知る”という行為を考えると、3つのプロセスがあると考えられる。1つ目は“頭で知る”、つまり知識として何かを知ること。2つ目は“心で知る”、つまり感情・感覚を伴って何かを知ること。「バングラの子どもの目がきらきらしている」とか「スラムとはこういうもの」と、知識として知っていたものが、実際に子どもたちと接したとき、またスラムに行ったとき、強い感情とともに自分の中に残った。心で知るということは、その知識が自分のものになっていくということ、とも言える。ただの知識・問題だったことが、自分のこととして私にふりかかってきた。ここで3つ目のプロセスは“体で知る”つまり“知ったことを実践する”ことである。いくら知識が自分のものになってもそれを行動にうつしていなければ意味がない。自分のものになった知識を他者のために還元していけることが、“知る”＝“愛する”なのではないだろうか。

「知る」ということがいかにパワーを持ち、「教育」がいかに人間の可能性を広げる可能性をもっているか、それを自分のこととして知った今、私がまず実践すべきことは勉強である。バングラでの感情をもとに勉強に励み、その感情(疑問)の原因を学問的に追究したいと思う。“実践”は難しく常に課題であるが、ベストを尽くしたい。

温かい人たち、大自然に囲まれて幸せだった。そして神さまが共にいてくださるということ素直に感じられる日々でもあった。自分が何を感じ、自分はこれから何をするのか、常に自分と向きあえたのは「あなたは どう思うか」「あなたは 何をするのか」という神さまの問いかけ、「人を生かしてください」神さまの存在があったからだと思う。このスタディツアーに参加したのは20代をどう生きるべきかという問いのためだったが、神さまは「勉強」という具体的な課題と、もう1つ大きな答えをくださった。よく歌って大好きになった歌の歌詞、“Seek Ye First the Kingdom of God and His Righteousness”である。神さまの視点で本当に大切なことは何かということ問い続け、「人を生かす」人を目指していきたい。最後に、スタディツアーに参加させてくれた両親、ACEFとBDPの皆さん、神さまに感謝して終わりにします。



スタディツアーに参加して

高石 孝子(たかこ)

日が暮れると真っ暗な世界の中にちかちかと光るホテル、上を見上げると今にも落ちてきそうな大きな星 星 星。私たちの話し声しか聞こえない。歌声しか聞こえない。いやカエルの合唱も聞こえてくる。

とても貴重な時間と空間をネトロコナで感じることができました。

日本にいと電気が消えるのは事故や台風が原因という特別なこと。バングラデシュでもダッカのような大きな都市は夜でも明かりがついているが、地方ではまだまだ電気を十分に手にいれることがむずかしいのでしょう。プーパイルでもネトロコナでもランプやろうそくの明かりで不足を感じないのは不思議なこと。台所で小さな灯りの中で私たちの食卓を用意してくださることに感謝を。ろうそくの明かりの中での食事は船戸先生の「6つ星レストランの食卓です」にまったく同感。光と影のなか心が落ち着きます。美味しい料理をお腹に落ち着いて納めます。

水は蛇口から出てくるのではない。気をつけて大きな水のタルに井戸からいれてくださるスタッフの姿に感謝。自然と水浴びの時使用量が減るのです。一桶の水を有効に使うことに頭を使って。

学校訪問の途中渡し船に乗りました。棹さしは少年。料金は一人片道1タカ。一日何回対岸との間を行き来しているのでしょうか。収入はどのくらいあるのか？外見からは生徒のような年齢にみえるが、働いているのです。学校の外にもたくさんの子供の姿を見ました。(私の孫へのお土産は一つ2タカのおもちゃ。またルティの伸ばし棒は20タカ)

BDPの学校もたくさんになってきたけれど、まだまだ勉強できない子供がいるのですね。教育を受けられることで将来の夢を持つことができ、希望を持つことが出来る。希望が与えられると喜びをも持つことができると思います。

私はバングラデシュの子どもたちに会うまで教育のもつ力に大きなものを感じることはありませんでした。しかし今は違います。先生の顔・目をしっかり見て質問に対して答えている子供の様子に先生への信頼が溢れているように思えました。地域で先生は大切な存在で尊敬されていると言われているのが解る気がしました。教育は人も地域も育てる力があるのだと。

私は戦後教育環境の整った時代に大きくなり、また自分の子供たちもたくさんの選択肢の中で当たり前のように成長してきました。アルバートさんが多くの選択肢の中で生きる日本のことも、ご飯を食べる食べない、学校へ行く行かないなど選ぶものの少ないバングラデシュの子供、日本人に自分の出来ることを考えて欲しいと言われることにもう若くはない私だけれど、精一杯考えていきます。考えると、5年前にも2年前にも同じ思いを持ったのです。それ以来ずーとバングラデシュの子どもたちのことを忘れてはいません。それが私にとって生きる希望であり喜

びだと。その喜びをくださった神様に心からお礼を言います。

船戸先生の30回目のスタディツアーに参加することが出来、思いを新たにしました。

住んでいる広島で、大切な友人であるBDPのことを回りに伝えていきたいと思います。また、生活に必要な資源の使い方(電気 水)を見直して生きたいです。

でも またバングラデシュの風に出会いたい！！ すべてに 感謝です。

メンバーのみなさん とてもいい時間を共有できました ベシベシ ドンノバット

(付録)私は Nani アミ ナニ プーパイルのスタッフサイフルさんにナニと呼ばれて??
「何?」と答えたわたし。ナニってベンガル語でおばあちゃんという意味とか。





ネトロコナにて15年前のプーバイルを思い出す

高崎和子

今回は一度訪れてみたかったネトロコナに行くことができました。ダッカから車で5～6時間ゆられネトロコナに向かいました。そこには15年前に訪れたプーバイルと同じ風景がありました。現在のプーバイルはダッカから1時間弱で行き来が出来、人々の生活も変わってきています。そのとき一緒に参加した友人が、ここにはゴミ一つないと深く心を痛めていました。ここネトロコナも貧しさの中で暮らしている人々に出会いました。BDPの学校に通って元気に喜々として学び、遊んでいる子どもものとなりに、家の事情で親の手伝いをし、働かなければならない子どもがいます。学校訪問の途中、舟に乗り川を渡りました。その舟をこいでいるのは、子どもでした。私はその時川岸まで子どもたちが見送りに来て手を振ってくれている子どもに船の上からいつまでも、いつまでも手を振り返していました。ふっと横を見ると少年が必死で櫓をこいでいました。降りる時「ドンノバッド」と言うと、少年は言葉はなくなっていました。少年の目に私たちはどのように映ったのかと思うと心から離れなくなってしまいました。15年前プーバイルで舟に乗ったときもやはり少年が手伝っていました。貧しい農村では子どもたちがまだまだ労働力になっている現状を見ました。

ACEFに長く連なってきましたが、自分として今何ができるのかと考えています。ACEFとBDPがバングラデシュにおいて子どもたちのために良き働きができるように少しでも協力していきたいとの思いを、今回さらに強くした旅になりました。いつものことながらBDPスタッフのみなさんの心あたたまる受け入れに感謝しています。



バングラデシュ・ツアー随想

小川直子

ひよんな事から今回のツアーに参加することになった。昔キリスト者ワークキャンプに何回か参加したことがあったので、レンガ一個でも寺子屋建設のため運べたら嬉しいと思っていたら、オリエンテーションで、スタディーツアーであり、ワークキャンプでないとの船戸先生の説明であった。現地でBDPの働きを見、お金は出すが、手出しは一切せず、現地の方々が、「寺子屋」を創っておられるのを見てACEFの貴重な存在意味を知ることができた。普通のツアーの感想なら、気軽にすらすら書けるのに、今回の場合なかなか感想が出てこない。私は鈍いので、実質5泊のバングラデシュの生活では、ちゃんとした感想が熟成されない内に倉から出されて日光に当てられる気がして、大いに戸惑っている。同時に今回の旅の内容があまり変化に富み、一つひとつ重要で重い意味や背景をもっているのも、簡単に書き出せないこともある。しかしこのように前書きを書きながら、頭に浮かんできた事項を羅列してみようと思う。

- イ) 大学の一、二年という若さ一杯の、しかも優秀な女性たちと一緒になれたこと。主催者側としては彼らの将来にかける期待はとても大きいと思うが、4人4様それぞれ个性的でしっかりした意見をもたれており、私としても種はちゃんと蒔かれたと思うし、彼女らの将来の進路を楽しみにしている。次に3人のバングラ通の年配女性と交流できたこと。私が「サロワカミューズ」「アッサラーム」「ドンノバッド」がスムーズに出るようになったのは、6日目位からなのに、彼らはBDPの方々の名前はもちろんベンガル語を私から見ると99%物にされている。また社会的にも献身的にボランティアワークに励んでおられる生活力のある達人であり私としては想像以上の恵みをいただいた。最後になりましたが、長年JOC S、BDP、ACEFに熱い思いを持って係わってこられた船戸先生のラストツアーに加えただいたことは光栄でした。またそれを継がれる新進気鋭の中川さんのファーストツアーであったことも、予期せぬ収穫でした。船戸先生とは一見対照的な若い中川さんがまわりの圧力に潰されることなくACEFのお仕事に専念されることを願っています。
- ロ) 第二次大戦前後の日本と日本人に会えたこと。敗戦後練馬の今住んでいる家の井戸でやたらに野菜を洗わされたこと、見上げる夜空に星がネトロコナよりはっきり大きく見えたことを今更のように思い出した。敗戦以前の日本の、特に農家の女性が家族の中で一番早く起き、昼は男性と同じく働き、夜は疲れを取る間もなく、台所で働き、一番遅く寝たと聞いた。ネトロコナの最初の夕方、アルバートさんが私に話して下さった昔の日本の女性と同じ状態のバングラデシュの女性の話にも、私たちの食事を専念して作って下さったそれぞれ2人の女性の姿が重なり、自分の現在の自由で、好きなことのできる身分にハッとさせられた。日本の性差別は法律的にも、精神的にも戦前より大分改善されてきており嬉しいが、バングラデシュの女性一般が様々な制約から開放されるのに、何十年、何百



年掛かるのかと思った。そしてマラカール女史・船戸先生の始められた運動の意味深さを再確認しました。

- ハ) 子どもたちの懸命さと先生方の教えることへの情熱と人々の生活。初めて訪問した教室を出る時1人の男の子が私に何故か緑色の卵の陶器と茶色の小さな卵の置き台のような陶器を渡してくれた。「ぼくのプレゼントだから受け取って。」と目で訴えているようだった。先輩としてセンターに訪れて話して下さった若い由里子さんの、昔自分たち用のお皿も十分でないスラムの自分の家に子どもが招き入れてくれた話と同じだと感じた。どの学校の児童も精一杯声を張り上げて繰り返し、手を上げ、書いていた。先生も指導法を研究され、一人一人を観察し、やはり声を張り上げ、板書し、適切な教材を用意されていた。あそこには日本にある「いじめ」なるものはないのではないのか。先生方は100%児童に惚れ込み、児童は100%先生を信頼している。あんな美しい師弟の関係は日本の学校から無くなっているのではなからうか。世界一幸せな師弟の姿を「貧しい」と言われている地で見ることができたのが、嬉しかった。

各教室の格子の外から中を覗いている幼児、児童、青年、大人はあの日だけだったのだろうか。十数名の大人を乗せて木の船を漕っていた少年の歳は、家庭はどうだったのか。その目は大人のプロの如く、仕事を忠実にこなす遊びとは程遠いものだった。親に稼ぎを渡した後、少しは甘えられるのだろうか。弁当を持って来ないと着けない位遠くから私たちを見に来た数人の女性は何を見、何を考えつつ帰途に着いたのだろうか。

宿舎の周りは追い払っても、追い払っても集まってくる男の子、青年、その遠くに立つ老人の姿は忘れ難い。宿舎から少し離れて私たちを取り囲んだ彼らは、まわりが暗くなり顔の判別も難しくなっても、その場から去る気配は一切見られなかった。時間を区切り、たまにはお金で買う私たちとは「時間」の観念が違うようだ。

そういえば、宿舎でのプログラムとプログラムの間も「バングラデシュ・タイム」がゆっくり流れ、本当にのんびり過ごせた。昔私たちの教会でも「野方時間」という言葉があったが、数年で消えてしまった。「良き時代」の遺物に触れた思いだった。

- ニ) ヘモントさんのハルモニアと独特なアジア風な哀愁を帯びた歌と力ある歌声。ずっと叩き続け指先が痛くならないかと心配したステファンさんのドラム。もう私の耳には響かなくなったのもう一度、チャンスがあったら聞きたい。2人を囲むスタッフもあれこれリクエストをし、歌を楽しんでいた。しかもローソクの下で。一幅の生きた名画の中にいるようだった。そういえば船戸、中川、井上、高崎、高石・・・も「みんなであうおう」を外のベンチで歌いまくっていた。

- ホ) 最後にバングラの涼しい風、赤い太陽、白い太陽、赤い夕日、暗い畦道、もみがらで上手にご飯を炊いていた女の子……

こんなすばらしいツアーに参加でき、神様と皆様に感謝。これらの経験を自分だけのものにしないよう、私もチャンスを生かしたいと願っています。

ある少年との出会い

井上儀子

ネトロコナ地区への訪問は、個人的にある少年との再会を楽しみにしていた。彼の名はノヨン君。今年9歳になる。お父さんとお母さんがいつも私たちSTメンバーのお世話をしてくださるので、その間、小さな弟が赤ちゃんの時から面倒をよく見ていた。BDP小学校の3年生になっているはずだった。ところがいつも真っ先に駆けつけてくるノヨン君がいない。どうして？学校をやめた。なぜ？お母さんと話をすると、14歳の長女に続き、12歳の次女もダッカに住み込みで働きに行き、ノヨン君は近くのお店で働いているという。8歳の妹は3年生になっていた。まだ3歳の弟はみんなの後を追っかけたり、抱かれたり、当然のことだが子どもらしい顔をしていた。でも、ノヨン君はわずか半年の間にすっかり大人びた顔つきに変わっていた。貧しさゆえにと言われても、何とも納得できない。お父さんと話をすると、長女も次女も1年生までしか学校には行っていないと言う。お父さんとお母さんはもちろん学校には一度も行ったことがない。お父さんはリキシャの運転手で、1日の稼ぎは多い日は200タカ(約400円)あるが少ない日は4タカ(約8円)もしくは何も無い日もある。リキシャは1日あたり50タカで借りているので何とも乏しいやりくりである。ネトロコナの町から車で30分くらい離れた田舎なので、毎日お客があるとは思えない。2年前の竜巻で家は壊され、引越し、また引越し、今の家は土地を借りて自分で家を建てたという。小さな土間一間に、姑と一緒に家族6人が住んでいた。その翌日の朝、ノヨン君が飛んできた。お父さんが学校に行ってもいいと言ったんだ！えっ本当？やったあ！遠くで私たちの会話をお父さんが立って聞いている。ところが、それは私の早とちりで、私たちが彼の学校を訪問する日に学校へ見に行ってもいいということだったのだ。ノヨン君は教室には入らず学校の前の道に立っていた。どんな思いで立って見ていたのか。学校からの帰り道、私は彼を抱きしめながら歩いた。半年前も、日没後の真っ暗な道をこうして二人で歩いたことを思い出した。「日本に連れて行ってよ。ぼくどんな仕事でも何でもするから。どんなに辛くても泣かないから。ねっ！連れて行って！」あどけない少年のたわいない夢と思い、「まず、一生懸命勉強することが今は一番大切なよ。」と諭したが、現実はこんなに厳しいものだった。「今の夢は何？」「またいつか学校に戻って勉強したい。」

ノヨン君、この夢をいつまでも持ち続けてほしい。そしてその夢がかないますように。



スタディツアーのすすめ

中川 英明

ネトロコナに滞在した4日の間に、多勢の人たちが日本人見物にやってきた。中にはお弁当を持ってずいぶん遠くからやってきた人たちもいたそうだ。何を思っただけでやってきたのか、見に来たけどがっかりして帰ったのではないかと、などと妙に気になる。そんな人々の中に、自転車に乗った5人組の青年がいた。他の多勢は女性たちの周りに群がっているけれど、彼らはぼくのところへやってきて、話しかけてくれた。“Bearded man.” “Bearded man.” と口々に言い合っていてここにこしている。イスラム教国バングラデシュで髭面が珍しいわけではないと思うが、そういえば髭を伸ばしている男性はそれほど多くないような気がした。以前はそうでもなかったそうなので、今は髭は流行ってないのかもしれない。年配の男性はたいてい豊かな髭をたくわえているけれど。

件の青年たちは、ネトロコナ・タウンのカレッジに通う高校生だそうだ。ぼくの方からはそれだけ聞き出すのがやっとで、こちらの質問には答えてくれず、質問攻めにされた。英語を使ってみたいらしい。名前や住所や家族構成などを聞かれたあとで、“What is your work?” ときた。“I am a househusband.” と答えると、「なんだそれ？」という顔をしている。説明しても合点の行かない様子なので、主夫という概念は理解不能なのだろうと判断し “I have no work.” と言うと、みんな急に納得して “Unemployment!” “Unemployment!” とぼくを指差し、ここにこ嬉しそうにはやしたてる。職がないことが嬉しいんだか、話を通じたことがうれしいんだかわからない。「な～んだ。失業者か。そんなら別に珍しくもないや。村にも大勢いるし。」と、彼らは去っていった。

これまで数回参加しようとして果たせなかったACEFのスタディツアーに、今回ついに参加することができた。バングラデシュ訪問は3回目だけれど、予想していた通り、出張で出かけていた時とは全く異なる経験ができた。目を輝かせながら一生懸命に寺子屋小学校で学ぶ子どもたちや暖かい眼差しで見守る先生たちのことは、聞いたことがあったけれど、直接会ってみると、それだけで言葉では言い表せないほど感動した。そして、スタディツアーの仲間たちと、毎晩のシェアリングで見聞きしたこと、感じたこと、考えたことを話しあえたこと、特に、まっすぐな心と健全な知性を持った若い人たちの経験と感受性を共有できたことは、大きな収穫だった。また、BDPのスタッフたちと直に会って話をし、彼らの努力と情熱を目の当たりにして、頭が下がる思いだった。そして、そんな彼らの楽しそうに働いている姿はとても印象的だった。ぼくも4月からACEF事務局で働かせていただけることになったので、彼らのように楽しく働きたいと願っている。

ベトナムやスリランカに住んだことがあるためにアジアの国々の状況や開発の問題について雑多かつ断片的で中途半端な知識を持っていて、心はひねくれ素直に驚いたり純真に感動したりすることができなくなってしまった中年オヤジが、今更ながらに参加しても、多くの学びと大きな感動を与えてくれるスタディツアーに、皆さんも是非ご参加なさいませんか。自信をもってお勧めします。





11. ありがとう船戸先生



ネトロコナ BDP 事務所前にて

—先生感想文

ロゴス(思想)とパトス(情熱)

スタディーツアーが目指すもの

事務局長 船戸 良隆

今回が最後のスタディーツアーかと思うと、何かグッとこみ上げてくるものがあるのではないかと考えて参加したが、正直なところあまりそのようなものはなかった。しかし、BDPのスタッフが、大変、気を配ってくださったことに対しては、心よりの感謝を申し上げたい。例えば、アルバートさんが同伴してくださったこと、ファルークさんが、バングラの 2 新聞社のインタビューを企画し、「バングラを愛した日本人」と題して新聞に掲載されたこと、これは私の記事が掲載されたと言うよりは、ACEF及びBDPが紹介され、ひいてはバングラを愛する日本人がいることが知らされたことに意味があったと思う。また、通常、一週間のツアーでは行かなかったダッカスラムにある学校の見学、子供たちのカルチュラルショーなど、多彩なプログラムを組んでくださったことに対しては、お礼の言いようもないほど感激した。

帰国後、この 15 年間のスタディーツアーというものは何であったかを考えてみた。このスタディーツアーが、私の学生時代の「筑豊の子供を守る会」の筑豊行きをイメージしていたことは確

かである。かつて隅谷三喜男先生が「どこへ行っても『学生時代、筑豊へ行きました』という人がいるよ」とニコニコしながら語ってくださったことが思い起こされる。ACEFの設立目標の一つに「若者の育成」が掲げられているが、まさに、このスタディーツアーは、その目標達成の大きな手段である。このスタディーツアーから多くのアジアに関心を持った人たちが生まれ、育ったことは感謝であり、主の御計らいを賛美したい。

それでは、何がそれらの人材を育て上げていったのだろうか。これは、ひいては「NGOとは何なのか」と言う問題に関ってくる大変重要な課題である。先日、ロシアのプーチン大統領のシエルパ(首脳会議の大統領補佐官)が来日し、日本のNGO代表と話し合った。その際、ほとんどの人が実際に面に関する発言をしたのに対し、私は次のような意見を述べた。「首脳会談というのは、異なった考えを各々が認め合うところに意味がある。それ故、ロシアが、NGOの目指している西欧型市民社会の問題点をスラブ的観点から批判することが重要ではないか。」

私がここで言いたかったことは、世界のNGO運動における思想性の欠如である。現在の世界の、そして日本のNGO運動には、技術論はあるが思想がないのではないか。例えば「貧困の問題」を考えるに際しても、「貧困とは何か」を「哲学する」ことが重要ではないかということである。

私たちのスタディーツアーは、そのことを目指していた。スタディーツアーというのは、たんに「楽しければいい」「良い思い出になればいい」と言うものではない。そこで「人が変革され、生

まれ変わって」、イエスの言う「仕えられるためではなく、仕える」人になる、その転機とすることが重要である。そのためには、どうしても「深く考えること」と「限りない情熱を抱くこと」が必須なのである。私たちのスタディーツアーが、いつまでもこの「ロゴスとパトス」を失わないことを念願している。

一 先生から学生へ 結婚に関するアドバイス バングラデシュ最後の夜に

「結婚するとききにとめるべきこと」

- ① どんなに短所があったとしても、お互いに尊敬できる点を1つずつ持っていること。
- ② 夫婦とは「夫婦である」ものではない。「夫婦になる」のだ。

「結婚はタイミングと勢いだ」



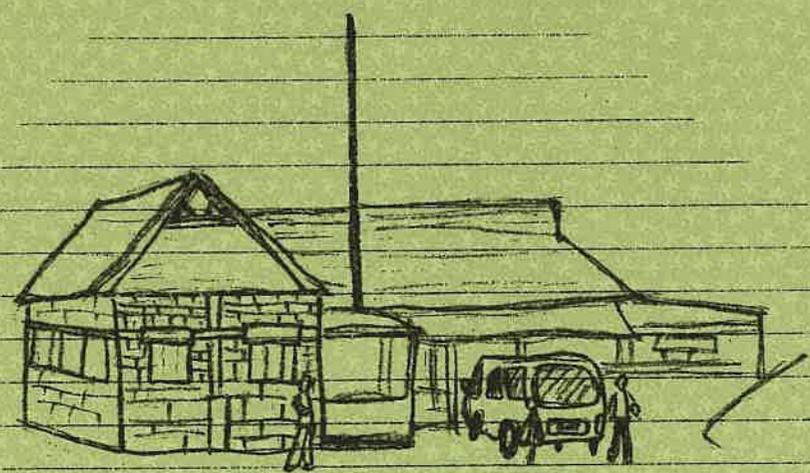
船戸先生、15年間本当にお疲れ様でした。 Bangladesh のスタディツアーでの経験が人生の転機となった参加者は数多くいると思います。このスタディツアーは、現在途上国で起きている問題を提起し、物事について深く考える機会を与えてくれる素晴らしいプログラムです。日本と Bangladesh の架け橋となってくださった船戸先生に心から感謝したいと思います。2006年3月をもって事務局長としての職を終えられましたが、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。





★ルジナちゃん★
ネトロコナのコックさんの娘さん。

「俺を撮れよ」と
言ってきたお兄さん



ネトロコナBDP office



Bangladesh に寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

個人会員	年額 1口	5,000円
団体会員	年額 1口	50,000円
学生会員	年額 1口	2,000円
一時寄付	随時	金額自由
郵便振替	00100-0-185540	

アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@acef.or.jp

<http://www.acef.or.jp>